

福祉系 対人援助職養成の 現場から^{③①}

西川 友理

Aさんの場合

その日、ボランティア先から学校に戻ってきたAさんは開口一番、「どうしよう、先生。やっちゃった。」と言いました。

生まれて初めて、児童養護施設にボランティアに行った学生Aさん。小学校から帰ってきた子供たちの宿題をみた後に、夕食前まで一緒に遊ぶというボランティアでし

た。

どんなところだろうかとドキドキしながら飛び込んだ第一日目、想像していたよりもずっと歓迎されている雰囲気です。子ども達からの第一声こそ、「お姉ちゃん誰？何しに来たん？」と、つっけんどんではありましたが、実習生慣れ、ボランティア慣れをしている子ども達だったようで、Aさんは色んな子ども達から声をかけられ、一緒に宿題をし、遊び、楽しい時間を過ごしました。

特に小学2年生のBちゃんはAさんのことをとても気に入った様子。他の子どもがAさんと遊ぼうとすると、「A姉ちゃん、なんで私と一緒に遊ばへんのっ！」と独占欲を見せてきます。困ったなあ、どう対応しようかなあなどと思いつつ、自分に愛着を示してくれるBちゃんに対して、まんざらでもないAさんです。

17時50分になりました。その施設の夕食時間は18時です。そろそろボランティアの時間は終わり、Aさんは帰ろうとしました。するとBちゃんが言いました

「A姉ちゃん是一緒にご飯食べへんの？」
「うん、お家に帰るわ。また来週来るからね。」

ふーん、とつまらなそうなBちゃん。そしてBちゃんは、Aさんの目を見て言いました。

「A姉ちゃん、お母さんおるの？」

Bちゃんの言葉を聞いたAさんは、「ぎくっとした」とのこと。そして一瞬止まった後、

「…さあ、晩御飯やから早く手を洗いに行ついで！」

と洗面所に急かし、そのまま帰ってきたらしいのです。

「きっとAちゃんは私を試していたのだと思う。それに対して私、一瞬止まっちゃったんですね。で、それからごまかした。

これって、よくないことですよね・・・」
Aさんはずいぶん落ち込んでいます。

「なんか、試されている感じがした。どうしたらいいかわからなかったんです。」

「『うん、おるよ』なんて言ったら、傷つくかな…でも、嘘つくのもちょっと違うし…。」

「というか、一瞬止まった私を、Bちゃんは“見た”んですね。私、Aちゃんにそんな姿を見せたんです。」

悶々と悩むAさんです。

Cさんの場合

Cさんはとある児童養護施設の1年目の職員です、子どもや同僚とのコミュニケーションにもやっとなれてきたCさん。特にD君はCさんが大好きで、Cさんの言うことをよく聞く、とても利発な小学1年生でした。

ある時、Cさんが禁止している事を珍しくD君がやってしまい、Cさんを困らせた事がありました。D君と言い合いになるCさん。互いにヒートアップしていった末、D君が、

「せやんな！俺なんかもう自分で考えんと、ずうっと、もう一生、C先生の言うこと聞いてたらええんやもん！」

と怒鳴りました。かっとなったCさんは、「そうそう！そうやで、その通りです！」と怒鳴り返しました。

その直後のD君の、冷たい表情。Cさんは一生忘れられないとのこと。小学一年生がそんな顔をするのか、というような冷たい目だったとのこと。うろたえたCさんは

「…ちょっと、言い過ぎたわ。ごめん。や、そういうわけやないよな。」
と言いました。

D君はプイとCさんに背中を向けました。

翌日、D君はいつもどおり、Cさんに懐っこく接してきました。もしかすると普段よりも甘えていた様子。しかし、昨日とは

同じ気持ちでなかなか接することが難しい C さんでした。

「昨日の D 君の試し行動、私はとっさに答えたけれど、あれは、よくなかったよな…。でも、D 君からあんな調子で怒鳴られたら、こっちもカッとくるやん…D 君に言われたようなもんや。あれは試し行動やんな。」

E さんの場合

E さんはアルバイト先の施設にいる F ちゃんの行動にほとんど困っていました。F ちゃんはちょっとしたことで癩癢を起し、E さんが困るような言動をします。

最近の F ちゃんは、宿題をしている最中に、漢字書き取りの量が多いとか、算数がわからないとか、E さんが F ちゃん以外の子ども問いかけに答えたとか、とにかく少しでも F ちゃんの気に障る事があると、ムスツとしながらエンピツを床に落とします。

「E、うちダルいわ。こんなん出来へん。」
そう言ってふてくされる F ちゃんです。

E さんは F ちゃんをなだめすかしてエンピツを拾い、F ちゃんの机の上に置きます。しばらくするとまた F ちゃんはエンピツを床に転がし、ふてくされ、E さんがエンピツをひろってなだめすかす。何十回と繰り返されるエンピツ落としに、E さんはどんどんうんざりし、エンピツを拾いあげる時にため息も出てきます。

しかし、ある時 E さんは、F ちゃんが施設の職員や E さん以外のアルバイトにはそのような態度をとらないという事をボランティア担当職員から聞きました。F さんはそれを聞いて少し優越感のようなものを感じ

ました。

「F ちゃん、職員さん達にもそういう甘えを出せないんだな…しんどいけど、私が受け止めてあげなきゃ。でもこれっていつまで続くんやろか…。ほんまはちょっと、いやかなり、うっとおしいねんけどなあ…。」

今日も何十回と嫌々エンピツを捨てるうんざりなどと考えると、アルバイト先に向かう足が重くなる E さんです。

子どもに「試されている！」 と感じる時

自分が子どもから試されている、と思う時はどんな時なのでしょう。

「試し行動」という言葉があります。これは、子どもが自分をどこまで受け入れてくれるか確かめるために、わざと相手を困らせるようなことをしたり、わざと怒らせるようなことを言ったりすることを指します。児童福祉の現場ではよく聞かれる言葉です。

しかし私は、試し行動と言われる行動が、果たして全て子どもの思いによってのみ成り立っているのかといつも疑問に感じます。

子どもが「わざと相手を困らせるようなことをする」と言いますが、本当に「わざと」なのでしょう。

試し行動は、その子どもに“無意識的に相手の愛情を確認したい行動を選択する心の状態”があると推測され、これに基づくと考えられる行動をとった時に、その行動に対してどう対応するといったのか困る支援者がいる、という構造になっています。

だとするならば、世の中にある「試し行動」という言葉で表現される行動は、その

全てがする方が「試そう」としている行動だとは言い難く、された方が「試されている」と感じただけの行動も結構あるのではないかと思うのです。

「試し行動」は主観的表現ではないか

今回この文章を書くために試し行動の定義を調べようと、CINII や J-stage といった論文検索サイトで文献を探しましたが、あまり明快な定義を見つけることが出来ませんでした。

試し行動について書かれたエッセイのようなものや、子どもに関わる人に対するアンケート項目の中などにはいくつか見られるのですが、試し行動そのものについて書かれた論文自体が大変少ないのです。これは少し考えればわかる事で、「試した」「試された」あるいは「困った」「困らせた」ということはその場においてその行動に関わったその人そのものが主観的に感じとるものであるために、論文の題材として分析できる客観的データとして取り上げにくく、論文などにしにくいためであろうと考えられます。それにもかかわらず、現場では本当によく聞く言葉です。

試し行動という言葉は、子どもを支援する側の者から主観的に名付けた行動であると言えます。しかし、その時その場における状況は、子どもをだけが作り出しているのではなく、支援者だけが作り出しているのでもなく、その2者のやり取りの中で生まれます、ということは、試し行動といわれる行動をとる子どもの心の背景に迫る事も大切ですが、同時に支援者が「試された」と感じた時の、自分自身の認識を見つめる

事」も必要であると思うのです。

なぜ「試された」と感じるのか

「試された」という言葉にはどこか被害者意識の匂いがします。「試される」のはあまりいい気分ではありません。子どもから「試された」と感じ、困り感を持つ時、人はとっさに相手をねじ伏せようとしたり、十分対応出来ずにごまかそうとします。あるいは相手は年端もいかなない子どもなのだから（ものを知らずに行動しているに違いない）…と考えたり、場合によっては可哀そうな子なのだから（わがままなことを言っても受け止めてあげないといけない）…と考えたりした上で、次の行動に出ます。

全てがそうだとは言いきれませんが、相手との関係性において試されているとか、困難を感じるとかいった時、実は自分の心にある抵抗を「この人は私を困らせようとしている！」と相手の行動に責任転嫁している事があるように思うのです。

特に子どもからの行動に対しては、その子どもとの関係において、自分の「相手よりも上位である大人の立場」を脅かされる事態が発生すると、支援者は混乱しやすくなるのではないのでしょうか。その行動は子どもと自分自身の関係において発生しているのに、子どもの背景に迫る等の原因探しばかりをして、自分を計算の外に置いて考えることで、自分が思い込んでいる「相手よりも上位である大人の立場」を無意識に守ろうとするようなことがあるように感じるのです。

さらには、相手より上の立場であろうとすればするほど、どんどん疲弊してしまう

ように思います。相手より上の立場とは、あからさまに相手を見下し、軽んじた行動をするといったことだけを指すではありません。子どもに対して強く正しく、自分が色々と助けてあげないといけない立場であると思ひ込む事もまた、子どもを自分よりも下の立場と認識することになる可能性があります。その認識を自分の自信を保つ手段として利用し、自分自身の自信のなさを守ろうとしているような時です。

しかし、大人は子どもよりも上の立場であるという考え方には何の根拠もないのですから、その立場を誇示しようとする様々な場面で矛盾が生まれ、支援者の方が疲弊してしまうのは当たり前です。

つばさ園の実践

『子どものニーズをみつめる児童養護施設のあゆみ つばさ園のジェネラリストソーシャルワークに基づく支援』という本があります。これには、京都にあるつばさ園という児童養護施設の実践が書かれています。これを読むと、つばさ園はその昔、体罰が当たり前だった時期があり、そこから膨大な試行錯誤を重ねて、現在では権利擁護と民主主義に貫かれた実践が行われている事がわかります。

この本にはたくさんの子どもの事例が書かれており、その中には世間一般には試し行動と呼ばれる行いについても書かれています。職員は、それらに対して困っていないわけではなく、またその背景に何かあるのか考察していないわけでもありません。「(日々、子どもから)職員は試されています」という一言はありましたが、その行動

が発生した時、子どもの行動に対して、「大人であるからという理由で上位に立とうとしていない」ということを強く感じます。子どもと向き合っ話し合い、職員の思う通りになる結果ではなく、子どもに納得させることだけを目指した結果ではなく、子どもと職員が話し合い、ともに子どもが成長していく事を目指していることがわかります。子どもに対して、一人の人間としての敬意をもって接する姿勢が貫かれています。

またその実践のために、職員の人権がきちんと守られる文化が施設内にあり、職員同士はもちろん、職員と子どももまた、学び合う関係が自然に出来ている事がわかります。変に自分の立場を意地を張って保たなくとも、ありのままの自分自身でいて良いと大人も子どもも安心しているからこそ、向き合っ話し合いが出来る環境になるのだという事を強く感じました。

1対1の人間同士として 向き合うための安心感

アドラーは、人間のあらゆる悩みはタテの人間関係（支配←→被支配関係）に起因すると言っています。

一方で、社会性を持って動く時に、何らかのヒエラルキーや役割分担が発生し、リーダーシップが生まれ、それから自然と上下関係が生まれるスタイルに慣れきっている私たちです。そして、子どもというものは「守られなければ生きていけない、力なく考えの浅い存在」という視点に慣れている私たちです。

最近でこそ、児童の権利に関する条約等

により、子どもの能動的な意見表明を尊重する考え方は広まってきていますが、まだまだそのような場面は少ないと感じます。「力なく、モノを知らない子どもを守ってあげたい」という思いをもって、しかしその実はそのような力ない存在に影響を与えられる自分という安心と自信を得るために、子どもと関わる仕事を選んでしまう人もいると思います。

このような社会に慣れてしまった人が、1対1の人間同士として、子どもと話を向き合って話をするには、よほど意識しないと難しいことかもしれません。しかし、支援する側の者が人間としての安心と自信を手に入れると、子どもと対等に話し合う感覚を手に入れることは、何かのきっかけさえあれば、そう難しい事ではないのかもしれない。

その後のAさん

「A 姉ちゃん、お母さんおるの？」と聞かれたAさん。その後、色々と自分なりに考え、実践を重ね、ある日、私に言いました。

「あれは普通に『おるよ』って答えたらよかったなと思う。普通に聞いてきたんだから、普通に答えるだけでよかったと思う。何か、自分で勝手に敵を作っていた感じ。」

そう言った彼女は今、障害児福祉の分野で、日々ご機嫌に働いています。

.....

参考文献：

大江 ひろみ 石塚 かおる 山辺 朗子 著『子どものニーズをみつめる児童養護施設のあゆみ つばさ園のジェネラリストソーシャルワークに基づく支援』 ミネルヴァ書房 2013年